

JSSH-ASSH Travelling Fellow報告記

名古屋大学手の外科
 洪 淑 貴

2008年度 JSSH-ASSH Traveling Fellowとして Michigan Hand Center, Mayo Clinic, Hospital for Special Surgery, Columbia University, Massachusetts General Hospital の5カ所を訪問して参りましたのでご報告いたします。

まず9月18日から3日間 Chicago で開かれた ASSH Annual Meeting に参加し、今回から新たに始まった試みである“Traveling fellow luncheon”で6分間の presentation をしました。誰もが名前と顔を知る ASSH の『巨人』たちの前で発表をするのは大変光栄なことではありましたが、ただただ緊張するばかりでした。糖尿病患者のバネ指の特徴についての発表をさせていただきましたが、熱心に聞いていただき、また質疑応答でも色々質問をしていただき、良い経験になりました。

今回訪問した施設のうち Mayo, HSS, MGH の3カ所は非常に有名で、訪問された方も多い上、村瀬先生の報告記に我々の経験がぎゅっと凝縮されて述べられていますので、私は Michigan Hand Center, Columbia University での経験について印象を追記することにします。

1) Michigan Hand Center (Dr. Kevin Chung)

Chicago からレンタカーで約6時間、典型的なアメリカ中西部の大学町、Ann Arbor にある Michigan University の形成外科教授である Dr. Kevin Chung がほぼ一人で resident 達を率いて診療しています。副学部長も勤めるお忙しい中、到着翌日の朝の walking tour から最後の banquet まで、休憩時間を含めて訪問前から全日程のスケジュールを立ててくださって、迎いの車にはオーディオから日本の歌が流れているという細やかな心遣いには感激しました。Staff surgeon が一人でも、有能な Physician's assistant とアメリカで最も激しい競争を勝ち抜いてきた Plastic surgery の resident 達を教育し、research supporting staff を教育することで、無駄のない高いレベルの医療と臨床研究を実践していると感じました。ここでも presentation の機会を与您いただき、名古屋大学で治療した280例以上のキーンベック病症例の治療成績、現在の我々の治療方針について30分にわたって講演させていただきました。

2) Columbia University (Dr. Rosenwasser と Dr. Strauch)

Columbia University のあるあたりはヒスパニック系住民が多い庶民的なエリアで、住民の多くは英語が十分に話せません。ここでは Dr. Strauch の予約なしの外来と予約外来、それから Dr. Rosenwasser の予約外来、と主に外来を見学しました。予約の有無(=貧富の差)にかかわらず丁寧に患者を診察する Dr. Strauch は、時に保険のない患者がいるとその人にとってベストの選択を考えて指示(=教会の運営する無料の病院へ紹介状を書く、保険の手続きを手伝ってくれるソーシャルワーカーを紹介する、など)し、簡単な会話はスペイン語で、複雑な話は電話通訳サービスを駆使して患者が納得するまで説明する、非常に誠実な方でした。また Dr. Rosenwasser のオフィスは高級店の並ぶ5番街に近く、ヤンキース松井秀喜選手の手術をした高名な先生と緊張して出向くと、ご本人はとても気さくでユーモアのある方でした。たまたま1階のロビーでリハビリに来ていた松井選手を見かけたことを興奮して報告すると、さりげなく彼のリハ終了時間をチェックしてその頃にリハビリ室に連れて行ってくれ、引き合わせてくれるという粋な心遣いをしていただきました。また、舟状月状骨離解に対する独自の手術法(RASL法)や手根骨の acute ulnar translation の治療法について discussion でき、知的好奇心もミーハー心も充足される大変楽しい時間を過ごしました。

字数の関係でここに詳細を書けなかった施設も、質の高い医療・研究を行っている施設の共通点は合理的であるということです。アメリカは日本以上に医師の件費が高い国ですので、医師は医師以外では出来ない仕事に専念し、周りのスタッフはそれを支えるという体制がしっかり出来ています。日本もこういった合理化を進める必要を痛感しました。

また、出発する前はもちろん、旅が始まってからも不安がいっぱいでしたが、振り返ってみると米
 国だけでなく、ヨーロッパ、アジア各国の先生方とも知り合えて、草の根レベルの国際交流が出来たという実感がありました。

最後になりましたが、このような機会を与えていただきました理事長，国際委員会担当理事・国際委員会の先生方，そして良き先輩であり楽しい旅の道連れ，村瀬 剛先生に紙面をお借りして心より御礼申し上げます。



左から，村瀬先生，Dr. Kevin Chung，筆者